

なかしべ つ ちょう ほっかいどう
中標津町は、北海道
の東にある根室管内の
中ほどにあります。東
西およそ42km、南北
およそ27kmで、その
面積は684.87平方キ
ロメートルあり、琵琶
湖とほぼ同じ面積です。

町の北には千島火山
帯につながる山々があり、南にはなだらかな斜面につづき根釧原野が広がります。

夏の平均気温は20度ほどしかなく、冬の平均気温がマイナス10度ほどなので、一年間の平均気温は5～6度と、日本ではもっとも寒い地方に入ります。

記録をもとに札幌市や根室市と比べてみたところ、次のことがわかりました。



↑市街地から見える山々



↑格子状防風林

① 年間の降水量が少ない。

② 霜の降らない期間が少ない。

③ 夏季間は気温の低い日が多く太陽が照らしている時間（日照時間）が少ない。

④ 冬季間は雪が少なく地面が深く凍る。

⑤ 町内で地域差がみられる。

冬の寒さはきびしいため、地中深くまで凍ってしまいます。



↑ 夏のようなす



↑ 冬のようなす

中標津町の自然の特徴

町内の自然は、大まかに「山地」、
「平地」、「湿原性の土地」に分けられます。

標津岳や武佐岳をはじめとする山地は、主に溶岩で形作られています。平地では見ることもない滝があったり、化石が見つかることもあります。

また、近くにある摩周湖や摩周岳が大昔から何度も噴火をしてい

るので、私たちの足元にはたくさんの火山灰が降り積もっています。



↑ クテクンの滝

川は平地にたくさん流れています。それらは山々から湧き出た一滴から始まり、たくさんの小さな川を集めながら下流に流れ、大きくなっていきます。その代表的な川が標津川です。

川の近くには湿原性の土地があります。開発が進んだことにより、その範囲は昔と比べると大きく減ってしまい乾燥化が進んでいますが、貴重な植物が残されています。



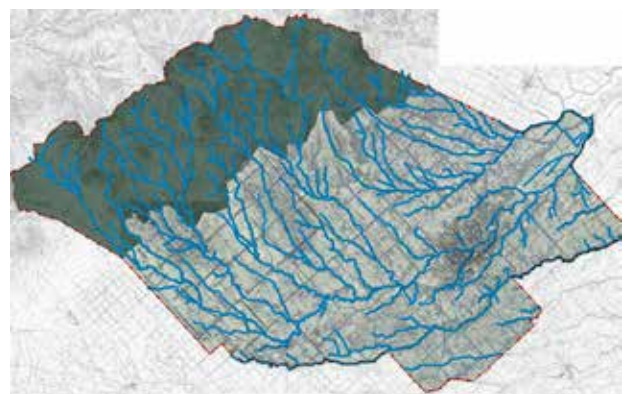
↑クテクンの滝近くで見つかった化石



↑積み重なった火山灰



↑摩周湖と摩周岳、西別岳

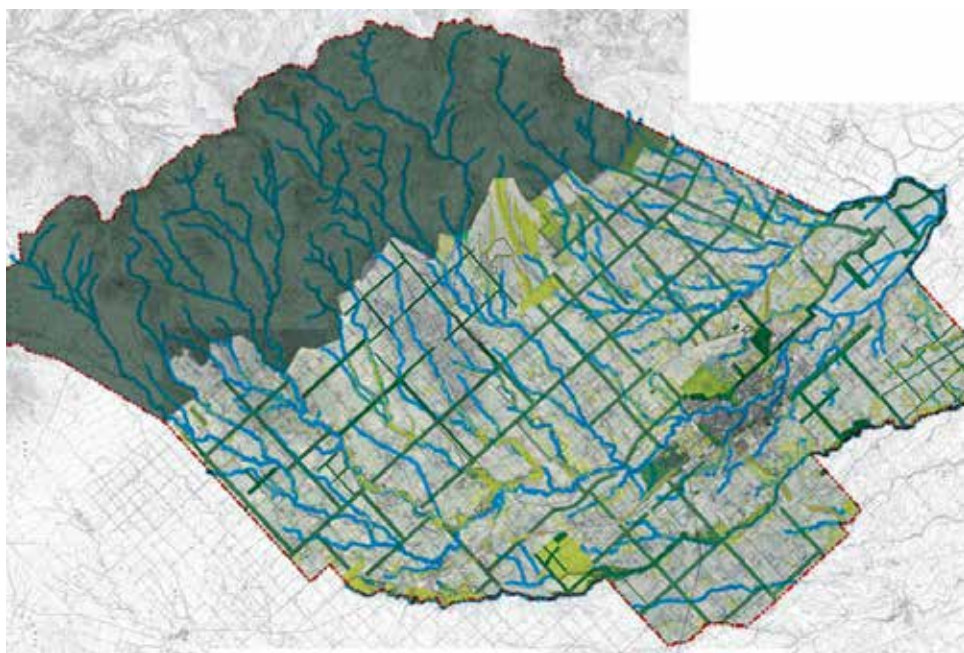


↑町内を流れるたくさんの川

動植物たち

中標津町には、2,000種類以上の動植物（菌類をのぞく）がいることがわかっています。日本の北に位置していることから、本州などでは高い山に行かなければ見ることができないような動植物が平地でも見られるのが特徴です。また、平地が広いので川が1本違うと見られる植物が違ったりすることがあります。

町内の動植物の調査をしたところ、中標津の代表的な産業である酪農に必要な牧草地には限られた動植物しかいませんでしたが、山々の森、川ぞいの林、街の近くの林、そして格子状の防風林が網の目のように重なりつながることによって、山々から平地までの自然がつながっていることが分かりました。



↑ いろいろな林や森が中標津の自然のみなもとです

画像提供：NPO法人景観ネットワーク

※武佐岳、標津川、地質について

中標津町郷土館のホームページを見てみよう

(http://www.nakashibetsu.jp/kyoudokan_web/r02.htm)



なかしべつ どうしよくぶつ
※中標津にどんな動植物がいるのだろう

なかしべつ ちょうきょう ど かん
中標津町郷土館のホームページを見てみよう

(http://www.nakashibetsu.jp/kyoudokan_web/r07.htm)



ほにゆうい
↑ 哺乳類



ちゆうい
↑ 鳥類



りようせいり
↑ 両生類



は ちゆうい
↑ 爬虫類



こんちゆう
↑ 昆虫



しよくぶつ
↑ 植物



きんるい
↑ 菌類



ぎよるい すいせいせいぶつ
↑ 魚類・水生生物

2

中標津町の文化財

現在、町内の文化財は、国の登録有形文化財が5件、町指定文化財が1件、埋蔵文化財包蔵地が72か所、国の天然記念物が7種あります。

国：登録有形文化財（建造物）

ち ほうどくりつぎょうせいほうじん ほつかいどうりつそうごうけんきゅう き こう のうぎょうけんきゅうほん ぶ らくのう し けんじょう
地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 農業研究本部酪農試験場
（旧北海道農事試験場根室支場） 農具庫



登録年月日
所在地
年 代
登録基準
特徴・評価

2009（平成21）年8月7日

標津郡中標津町桜ヶ丘1-1-3

1928（昭和3）年

1 国土の歴史的景観に寄与しているもの

市街地の南方に広がる敷地に南面にして建つ。桁行10m、梁間7.3m、切妻造平入の木造平屋建て、外装は妻上部を堅羽目板張とする。他は下見板張とする。隅柱や窓枠、建具等を白色に塗り、四面に窓をまわす方形の塔屋を中央頂部に載せる特徴的な外観になる。

『北海道の近代化遺産』（北海道教育委員会1995（平成7）年）。

※設計は北海道庁土木部建築課

※この建造物は酪農試験場の現用施設です。

防疫上の都合により、通常不特定多数の入場は不可となっています。

ち ほうどくりつぎようせいほうじん ほつかいどうりつそうごうけんきゅう き こう のうぎようけんきゅうほん ぶ らくのう し けんじょう
 地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 農業研究本部酪農試験場
 きゅうほつかいどうのう じ し けんじょう ね おろ し じょう しゅびようそう こ
 (旧北海道農事試験場根室支場) 種苗倉庫



とうろくねんがっ ぴ
 登録年月日
 しよ ざい ち
 所在地
 ねん だい
 年代
 とう ろく き じゆん
 登録基準
 とくちよう ひよう か
 特徴・評価

へいせい
 2009 (平成 21) 年 8 月 7 日
 しべつ ぐんなかしべつ ちようさくら が おか
 標津郡中標津町桜ヶ丘 1 - 1 - 3

しやう わ
 1928 (昭和 3) 年
 こく ど れき し てきけい かん き よ
 1 国土の歴史的景観に寄与しているもの

のう ぐ こ とうほう みなみめん た けたゆき はり ま きりづまづくり
 農具庫の東方に南面にして建つ。桁行 11 m、梁間 7.3 m、切妻造
 もくぞう かいだて ない ぶ とうざい
 の木造 2 階建。内部を東西二室に分け、60 cm の高さに床を張る。
 がいへき じやうぶ した み いたばり はしら まど ぬ しやう はいめんかく
 外壁は上部を下見板張とし、柱や窓などを白く塗る。正・背面各 2
 しよ や ね まど もう こしおれ や ね がいかん いんしやうてき そう こ けんちく
 か所の屋根窓を設ける腰折屋根の外観が印象的な倉庫建築。

び こう
 備考

ほつかいどう きんだい か い さん ほつかいどうきやういく い いんかい へいせい
 『北海道の近代化遺産』(北海道教育委員会 1995 (平成 7) 年)。
 せつけい ほつかいどうちやう ど ぼく ぶ けんちく か
 設計は北海道庁土木部建築課

けんぞうぶつ らくのう し けんじょう げんよう し せつ
 ※この建造物は酪農試験場の現用施設です。

ぼうえきじやう つ ごう つうじやう ふ とくてい た すう にゆうじやう ふ か
 防疫上の都合により、通常不特定多数の入場は不可となっています。

でんせい かん きゅうほつかいどうのう じ し けんじょう ね おろ し じやうちやうしや
 伝成館 (旧北海道農事試験場根室支場庁舎)



けんせつとう じ そ せき
 ↑ 建設当時の礎石

とうろくねんがっ ぴ
 登録年月日
 しよ ざい ち
 所在地
 ねん だい
 年代

へいせい
 2009 (平成 21) 年 8 月 7 日
 しべつ ぐんなかしべつ ちようさくら が おか
 標津郡中標津町桜ヶ丘 1 - 1 - 5
 しやう わ
 1927 (昭和 2) 年

登録基準
特徴・評価

国土の歴史的景観に寄与しているもの
種苗倉庫の東南側に東面にして建つ。南北 26 m、東西 9 m の鉄筋
コンクリート造 2 階建てで、中央に塔屋を上げ玄関を張り出し、左右
対称に縦長上下窓を配する。北海道第二期拓殖計画の一環として実
施された根釧原野の開拓事業を象徴する建造物の一つ。
『北海道の近代化遺産』（北海道教育委員会 1995（平成 7）年）。
設計は北海道庁土木部建築課

備考

※ 1927（昭和 2）年建築部分のみが登録されています。
※ この建造物は NPO 法人伝成館まちづくり協議会が管理をしています。見学にあ
たっては相談の上ご訪問ください。

中標津町郷土館緑ヶ丘分館（旧北海道農事試験場陳列館）



登録年月日
所在地
年代
登録基準
特徴・評価

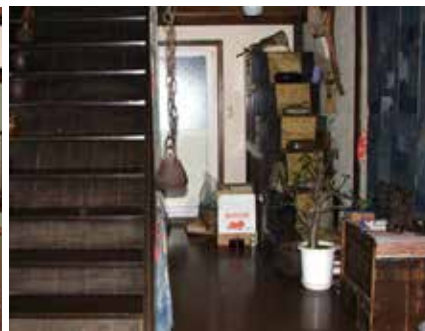
2009（平成 21）年 8 月 7 日
北海道標津郡中標津町丸山 4-3-1
1928（昭和 3）年 ※ 1982（昭和 57）年移築
2 造形の規範となっているもの
市街地の北方に位置する公園内に西面にして建つ。桁行 15 m、梁間
7.3 m、寄棟造平入の木造平屋建。腰下見板張とし、切妻を見せる玄
関を中心として左右対称に縦長上下窓を配する。玄関奥に風除室を設
け、内部は一室とする。丁寧にデザインされた瀟洒な建造物。
『北海道の近代化遺産』（北海道教育委員会 1995（平成 7）年）。
当初は北海道農事試験場根室支場庁舎の東に建てられた。
設計は北海道庁土木部建築課

備考

※一般公開しています。

（中標津町郷土館 WEBSITE : http://www.nakashibetsu.jp/kyoudokan_web/108.htm）

きたむら け じゅうたくしゅおく きゅうつち だ りよかん
北村家住宅主屋（旧土田旅館）



とうろくねんがつ ぴ
登録年月日
しよ ざい ち
所在地
ねん だい
年 代

2007（平成 19）年 10 月 22 日

しべつ ぐんなかしべつ ちやうあざ む さ
標津郡中標津町字武佐 957- 6

1927（昭和 2）年 ※ 1936（昭和 11）年移築、2001（平成 13）年改修

とう ろく き じゆん
登録基準
とくちやう ひやう か
特徴・評価

こくど れきし てきけいかん きよ
1 国土の歴史的景観に寄与しているもの

きやうこくてつかみ む さ えきしやうへん し が い ち た
旧国鉄上武佐駅周辺の市街地に建つ。

いり も や づくり かいだて が い へ き し た み い た ば り
入母屋造 2 階建て、外壁を下見板張。2 階は正面を半間張り出し、
ない ぶ へ や な ん ど な か ろ う か
内部は 4 部屋と納戸、中廊下などからなり、良質の意匠による床や
ちがいだな ひらしやいん の こ ほつかいどう えきていせい ど れきし つた こう
違棚、平書院なども残している。北海道の駅逓制度の歴史を伝える構
ぞう
造である。

び こう む さ えきていしよ しゆくはく し せつ ぞうちく
備 考 武佐駅逓所の宿泊施設として増築されたもの。

※この建造物は個人の所有ですので、一般公開はおこなっていません。

せいかつ ししやう ばあい そうだん な ほうもん えんりよ
生活に支障をきたす場合がありますので、相談無しでの訪問はご遠慮ください。



なかしべつ ちようし ていぶん かざい
中標津町指定文化財

かえる いしろう ど き
蛙意匠の土器



し てい ねん がつ び
指 定 年 月 日

1997 (平成9) 年 12 月 22 日

しよざい しよゆうしや
所 在 (所有者)

なかしべつ ちようきよう ど かん
中標津町郷土館

ひんしつおよ けいじよう
品 質 及 び 形 状

ど き ふかばち しよ ちようてん も はじようこうえん
土 器、深鉢 (4 か所の頂点を持つ波状口縁)

すんぼうまた じゆうりよう
寸 法 又 は 重 量

高さ 49.5cm、口径 36.7cm、底径 12cm

せい さく ねん だい
製 作 年 代

ぞくじようもん じ だいしよとう やよい じ だいしよとう やく
続縄文時代初頭 (弥生時代初頭、約 2,200 ~ 2,300 年前)

とく ちよう ひよう か
特 徴 ・ 評 価

ぞくじようもん じ だいしよとう ど き りようせいらい いしろう ど き ひじよう き
続縄文時代初頭の土器で両生類の意匠がある土器は非常に少なく貴重
な資料である。

び 考
備 考

はつけんねんがつ び ① 発見年月日 → 1963 (昭和 38) 年 10 月

はつ けん ば しよ ② 発 見 場 所 → 中標津町西竹遺跡

きよう ど かんない てん じ
※郷土館内に展示しています。

まいぞうぶん か ざいほうぞう ち い せき 埋蔵文化財包蔵地（遺跡）

なかしべ つ ちよう げんざい しよ い せき はっけん ど き せつ
中標津町には現在 72 か所の遺跡が発見されており、そこからは土器や石
器、新しい時代のものでは刀や鉄矛などが発見されています。

ほとんどの遺跡は「風があたらない」、「川や沢などが近くにある」という
りつ ち じようけん しべ つ がわすいけい む さ がわ どうほろがわすいけい はっけん
立地条件で、標津川水系をはじめ、武佐川、当幌川水系でも発見されています。

おおおかしひとびと す じめん ほ たてあなしきじゆう
大昔の人々が住んだ家は、地面を掘り下げて作られたことから「竪穴式住
居」といいます。状態のよい集落跡では住居の跡がくぼんだまま残っていま
す。



↑へこんで残る竪穴式住居



↑発掘調査のようす（昭和 39 年）

01	集落跡	なかしべ つ い せき	中標津遺跡	17	集落跡	む さ がわ い せき	武佐川 5 遺跡
02	集落跡	どうほろがわ い せき	当幌川遺跡	18	集落跡	む さ がわ い せき	武佐川 6 遺跡
03	集落跡	にしただけ い せき	西竹遺跡	19	集落跡	たねがわ い せき	種川遺跡
04	集落跡	にしただけ い せき	西竹 2 遺跡	20	集落跡	たねがわ い せき	種川 2 遺跡
05	集落跡	しべ つ がわ い せき	標津川 3 遺跡	21	チャシ跡	け ね べつ あと	計根別チャシ跡
06	集落跡	またおちがわ い せき	ショカンナイ川遺跡	22	チャシ跡	ますがわ あと	鱒川チャシ跡
07	集落跡	またおちがわ い せき	俣落川遺跡	23	集落跡	しべ つ がわ い せき	標津川 4 遺跡
08	集落跡	またおちがわ い せき	俣落川 2 遺跡	24	集落跡	どうほろがわ い せき	当幌川 2 遺跡
09	集落跡	またおちがわ い せき	俣落川 3 遺跡	25	集落跡	どうほろがわ い せき	当幌川 3 遺跡
10	チャシ跡	またおち あと	俣落チャシ跡	26	集落跡	どうほろがわ い せき	当幌川 4 遺跡
11	集落跡	またおちがわ い せき	ポン俣落川遺跡	27	集落跡	どうほろがわ い せき	当幌川 5 遺跡
12	集落跡	またおちがわ い せき	ポン俣落川 2 遺跡	28	集落跡	どうほろがわ い せき	当幌川 6 遺跡
13	集落跡	む さ がわ い せき	武佐川遺跡	29	集落跡	どうほろがわ い せき	当幌川 7 遺跡
14	集落跡	む さ がわ い せき	武佐川 2 遺跡	30	集落跡	ますがわ い せき	鱒川 2 遺跡
15	集落跡	む さ がわ い せき	武佐川 3 遺跡	31	集落跡	む さ がわ い せき	ショカンナイ川 2 遺跡
16	集落跡	む さ がわ い せき	武佐川 4 遺跡	32	遺物包含地	きた む さ い せき	北武佐 1 遺跡

33	遺物包含地	い ぶつほうがん ち	みなみ ぶ さ い せき	南武佐 2 遺跡	53	集落跡	しゅうらくあと	ますがわだ い せき	鱒川第 3 遺跡	い せき
34	集落跡	しゅうらくあと	しべ つ がわ い せき	標津川 5 遺跡	54	集落跡	しゅうらくあと	とうほろがわ い せき	当幌川 9 遺跡	い せき
35	集落跡	しゅうらくあと	しべ つ がわ い せき	標津川 6 遺跡	55	集落跡	しゅうらくあと	とうほろがわ い せき	当幌川 10 遺跡	い せき
36	集落跡	しゅうらくあと	しべ つ がわ い せき	標津川 7 遺跡	56	遺物包含地	い ぶつほうがん ち	しべ つ がわ い せき	標津川 9 遺跡	い せき
37	集落跡	しゅうらくあと	しべ つ がわ い せき	標津川 8 遺跡	57	集落跡	しゅうらくあと	しべ つ がわ い せき	当幌川 12 遺跡	い せき
38	集落跡	しゅうらくあと	お さ がわだ い せき	武佐川第 7 遺跡	58	集落跡	しゅうらくあと	しべ つ がわ い せき	ショカンナイ川 3 遺跡	い せき
39	チャシ跡	あ と	なか しべ つ じん じゃ	中標津神社チャシ跡	59	集落跡	しゅうらくあと	とうほろがわ い せき	当幌川 13 遺跡	い せき
40	集落跡	しゅうらくあと	がわだ い い せき	キョウカイ川第 1 遺跡	60	集落跡	しゅうらくあと	とうほろがわ い せき	当幌川 14 遺跡	い せき
41	集落跡	しゅうらくあと	がわだ い い せき	キョウカイ川第 2 遺跡	61	集落跡	しゅうらくあと	とうほろがわ い せき	当幌川 15 遺跡	い せき
42	遺物包含地	い ぶつほうがん ち	い せき	チライワタラ遺跡	62	集落跡	しゅうらくあと	なか しべ つ い せき	中標津 2 遺跡	い せき
43	集落跡	しゅうらくあと	がわだ い い せき	カンジウシ川第 1 遺跡	63	集落跡	しゅうらくあと	とうほろがわ い せき	当幌川 16 遺跡	い せき
44	集落跡	しゅうらくあと	がわだ い い せき	カンジウシ川第 2 遺跡	64	集落跡	しゅうらくあと	とうほろがわ い せき	当幌川 17 遺跡	い せき
45	集落跡	しゅうらくあと	がわだ い い せき	カンジウシ川第 3 遺跡	65	集落跡	しゅうらくあと	とうほろがわ い せき	当幌川 18 遺跡	い せき
46	集落跡	しゅうらくあと	がわだ い い せき	ポンモミジ川第 1 遺跡	66	集落跡	しゅうらくあと	とうほろがわ い せき	当幌川 19 遺跡	い せき
47	集落跡	しゅうらくあと	がわだ い い せき	ポンモミジ川第 2 遺跡	67	集落跡	しゅうらくあと	がわだ い い せき	オンネリウル川 1 遺跡	い せき
48	チャシ跡	あ と	とうほろがわ	当幌川チャシ跡	68	集落跡	しゅうらくあと	とうほろがわ い せき	当幌川 20 遺跡	い せき
49	集落跡	しゅうらくあと	またおちがわだ い い せき	ポン俣落川第 3 遺跡	69	集落跡	しゅうらくあと	とうほろがわ い せき	当幌川 21 遺跡	い せき
50	集落跡	しゅうらくあと	またおちがわだ い い せき	ポン俣落川第 4 遺跡	70	集落跡	しゅうらくあと	とうほろがわ い せき	当幌川 22 遺跡	い せき
51	集落跡	しゅうらくあと	とうほろがわ い せき	当幌川 11 遺跡	71	集落跡	しゅうらくあと	とうほろがわ い せき	当幌川 23 遺跡	い せき
52	集落跡	しゅうらくあと	またおちがわだ い い せき	ポン俣落川第 5 遺跡	72	集落跡	しゅうらくあと	とうほろがわ い せき	当幌川 24 遺跡	い せき

国：天然記念物（地域を定めず）

天然記念物とは、動物、植物、地質・鉱物などの自然物に関する文化財です。

特別天然記念物

鳥類：タンチョウ

天然記念物

鳥類：オオワシ、オジロワシ、シマフクロウ、ヒシクイ、

クマゲラ

昆虫：カラフトルリシジミ



↑タンチョウ



↑オオワシ



↑オジロワシ

3

中標津町

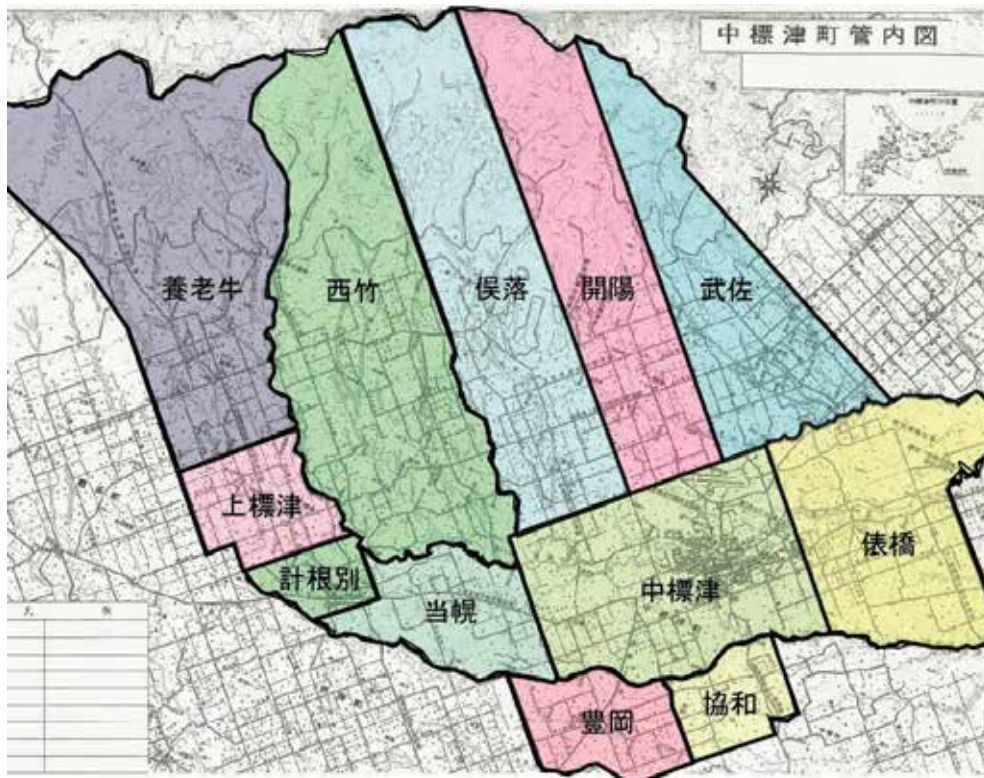
ー地名のおこりー

北海道の他の地域と同じように、中標津町もかつてはアイヌの人々の活動の場でしたので、生活にちなんだものや、地形を表した特色あるアイヌ語地名が川の流にそってつけられていました。

また、その他にも移住が始まってからつけられた地名もあります。

町内の字名のうち、もともとアイヌ語地名だったものは「俣落」、「武佐」、「当幌」、「計根別」、「養老牛」で、移住が始まってからつけられた地名は「俵橋」、「開陽」、「協和」、「豊岡」、「西竹」、「中標津」、「上標津」です。

なお「上標津」と「中標津」は日本語とアイヌ語の合成語です。



また おち
俣 落

またおちがわ ち めい
俣落川からつけられた地名で、もともとはアイヌ語です。

ほつかいどう え ぞ ご ち めいかい ふゆいるがわ このかわ か しよ さけおお
『北海道蝦夷語地名解』には「冬居川、此川「メム」三箇所アリテ鮭多シ
とうじつ またたいりゅう ゆえ な ある
冬日モ亦滞留（スルコトアリ）故ニ名（ヅ）ク或（イハ）アイヌハ「マタオ
ち」ト云ウハ訛ナリ」とあって、この解釈をとる人が多いようです。

むかし さけ
昔は鮭が多く上がったという話を聞きますが、メム（水の湧いている所）
が3か所あるということについてはよくわかっていません。

「マタ」は冬のことであり「オチ」を「オツ」とすれば「オツ」は“群在する”
つまり“ごちゃごちゃ” いるという意味になります。「前の語が名詞である
と「・・・群在する」という意味で、動詞に続けば「いつもそこで・・・す
る」の意になる。」（知里真志保・『地名アイヌ語小辞典』・1956（昭和31）年）
とのこと。

「マタ」は、冬という名詞であるから、訳すと「冬が群在する。冬がごちゃ
ごちゃいる」となります。「マタオチ」だけでは冬に何が群在していたかわ
かりませんが、冬にたくさん鮭がいたと解釈したものかもしれません。



武佐

武佐川からつけられた地名。もともとはアイヌ語です。

釧路市にも全く同じ地名の「武佐」がありますが、現在でも意味は分かっていません。いろいろな説があります。

1. 松浦武四郎の『知床日誌』では「モサ」（イラクサの意で、この植物から織物や糸の繊維を取った）となっている。もともとはイラクサの生えていた沢かもしれない。「モサ」→「ムサ」？

2. 永田方正の『北海道蝦夷語地名解』では「？」となっている。

3. 大正時代の初期にこの地で「幣場」（ヌサとはアイヌの人たちが木を削ってつくるもので、神に祈る時に捧げる）を見た人がいる。「ヌサ」→「ムサ」？

4. 札幌鉄道管理局の『北海道駅名の起源』では「意味は明らかではない」。

これら他にも説がありますが、いまだしっくりくるものはありません。今のところはクエスチョンマークを付ける他はないようです。



↑武佐地区のお祭りのようす

とう 幌

とうほろがわ あざめい
当幌川から字名をとったもので、もともとアイヌ語地名のひとつです。こ
ちめい かいしゃく
の地名の解釈については、

1. 『北海道蝦夷語地名解』〔永田方正〕→「沼川」（ホロは川の意味）
2. 『アイヌ語地名解』〔更科源蔵〕→「沼川」（野付湾を沼と解釈）
3. 『萬覚帳』〔加賀伝蔵〕→「川有、沼おふき也」
4. 『東蝦夷日誌 八編』〔松浦武四郎〕→「沼多き故に沼川という」と記
さい
載されています。

つまり「トウホロ」の「トウ」は「ト・トー＝沼」という解釈で共通して
いるのですが、「ホロ」を「ポロ＝大きい」とするか、「オロ＝～の中、～の
ところ
所」とするか、「ホロ＝川」の意味にするかで解釈も違ってきます。

とうほろがわ ちゅうりゅう か りゅう しつ ち
当幌川は中流から下流にかけて湿地は多いのですが、沼というほどのもの
は見あたりませんので、野付半島に囲まれた湾を沼として「沼の・所の・川」
かいしゃく
と解釈したのではないかと考えられます。



計根別

この地名も町内に多数存在するアイヌ語地名のひとつです。

江戸時代から明治時代の古文書には「ケニタエ」、「ケネカ」、「ケネカフト」、「ケネオイカペツ」など、計根別に関係すると思われる記述がいくつか出てきます。その中でも「計根別」の語源になったと思われる「ケネオイカ」の意味には「ケネウ・オ・イカ（路鰯が・そこで・越える）」と「ケネ・オ・イカ（はんの木川を・そこで・越える）」という説がありますが、解釈の仕方によって大きくその意味が変わってしまいます。ただ、ケネカ川にはポンケネカ川という支流がありますが、松浦武四郎の『志辺津日誌』ではこの川について「はんの木が多い」と説明しています。

「ホン」もしくは「ポン」は「小さい・子である」といった意味ですので、「ケネカ」を親とすると「ケネ・オ・イカ（はんの木川を・そこで・越える）」が真実により近いと思われます。しかし、いつからこの地域が計根別と呼ばれるようになったかは不明です、1897（明治30）年測量の地図には「計根別」という地名は記載されていませんでしたが、25年後の1922（大正11）年測量の地図には「計根別」と記されていました。

今は役場の支所や農業高校があります。



↑ 計根別支所

ようろうし
養老牛

一見すると和製地名のようですが、実はアイヌ語地名のひとつです。

1916（大正5）年、養老牛温泉の開発につくした西村武重は「ヨローウシ」というカタカナ地名に、はじめ「養老趾」とあて字をしました。その後「養老牛」とあらため、これが地図に採用となり、字名になって現在に至っています。

1. 「エ・ウォル」→「頭を水に突っこんでいる意」（『北海道地名史』、更科源蔵）

2. 「エルオシ」→「山が岩崖になって水中に入り込んでいる所」（『地名アイヌ語小辞典』知里真志保）

3. 『久摺日誌』（松浦武四郎）の摩周湖の図にヨロウシという地名があり、「アイヌが木幣を作り立て拝す」と説明をつけています。もしこのことが熊祭りに関係があるとするならばヨローをイオ（ヨ）マンテの変化したものと考えられます。

4. 「イ・オロ・ウシ」→「それを・水に漬ける・ところ」（山田秀三）。本田克代の聞き取り調査で「虹別のメノコがここへ来てイラクサを浸していた（ふやかして繊維をとるため）」との話もあります。

また、西村武重も「老女たちは、イラクサやオヒョウの皮などを出湯にさらして、その繊維で糸を作って、アツシを織る」、と『養老牛の今昔』に書いています。



↑モアン山

1917（大正6）年10月13日、第14代北海道庁長官の俵孫一ら一行70人が中標津原野を視察にきました。

それは北海道第1期拓殖計画というものの実施の状況と、入殖後間もなく冷災害にあい、苦しんでいる移住者の実態にふれるためのものでした。その頃の標津川14線には橋がなく、川を渡るにはすべて船によるものであったため、俵孫一長官一行の通行はまず無理なものでした。しかし地域の人たちは忙しい時期だったにもかかわらず、全員で橋を作りはじめ、4日間不眠不休のすえに橋を完成させました。

こうして俵長官一行は無事に川を渡ることができたわけですが、これに感激した俵長官はすぐに橋の新設を命じて立派な木橋を完成させました。この時の小学校教員の向井義弘さんが、これを記念して俵長官の姓を橋の名前として「俵橋」としました。そしてこれが地名となりました。



↑ 2代目俵橋の渡り初めのようす

開陽

北海道の地名の多くは、アイヌ語地名に漢字をあてたものですが、1915（大正4）年、移民指導者として井沢好松、河野竹太郎、木村忠作らの3戸が入地したところは中標津原野22線で、当時、ここを通称「中標津原野開墾指導所」、または「新区画」とよんでいました。

1918（大正7）年に学校ができることとなったのですが、この地の名前がないので、地域で相談した結果「陽に向け発展する。太陽のごとく拓け隆々発展する」ということを願って「開陽」と名付けたといわれています。

また、テレビ中継所や三角点のある台地は1929（昭和4）年から馬の放牧地として開放されていましたが、ここにスキー場ができたのは1960（昭和35）年のこと。さらに、1961（昭和36）年にはNHKのテレビ中継局が置かれました。

当時地域の人たちは、通称「武佐台」と呼んでいましたが、開陽にあるのに武佐台ではおかしいので、正式な地名を調べてみたところ無名であったため、1962（昭和37）年2月11日に、NHKテレビ中継局の開局を記念して行われた、第3回町民スキー大会において当時の尾崎豊町長が「開陽台」と命名しました。



↑ミルクロード

1955（昭和30）年4月、豊岡とともに別海町（当時は村）から編入された地区です。ここは1928（昭和3）年に入殖がはじまりました。当時は『しののめ』、『ねいらく』、『春別』でひとつの地域を三分していましたが、その後それでは不便だということで、地域の人たちが話し合いをし、「協心同力の精神によって地域の振興を図ろう」ということで、また、一説には「中春別移住者世話所が名付けた」というのもあります。

ちなみに『しののめ』は「東雲」と書き、「明け方、あけぼの」の意味で、『ねいらく』は「寧楽」と書き、「安じて楽しむ、安楽」という意味を持っています。



↑ 協和地区から眺める山々

とよ おか
豊 岡

この豊岡も、「協和」と共に別海町（当時は村）から1955（昭和30）年4月に中標津町へ編入された地区です。開拓は1928（昭和3）年の入殖から始まりましたが、その地名については色々な説があるようです。

1. 「1930（昭和5）年頃、小原好次の発案で富岡という地名ができたが、村役場の手違いで豊岡となった」
2. 「九州の福岡から多くの入殖者を迎えて福岡の岡をとり豊かなる将来を願い豊岡とつけた」
3. 「豊かな野であったので、豊野と名付けるつもりで役場へ届けに行ったところ、当時別海に富岡と名付けた所があり、係の者が誤って豊野の豊と富岡の岡をとり豊岡とつけてしまった」（『豊岡の歩み』より）。

また、「入殖当時は豊野といわれていた。それが、別海村役場から来る公文書はすべて豊岡となっている。村役場で間違ったことから豊野が豊岡に変わり、現在におよんでいる。」（『中標津町小史』より）とあります。



にし たけ
西 竹

1916（大正5）年、養老牛温泉の開発に手を染めた西村武重は同7年に、
 俣落川から養老牛温泉までの国有林を約16平方キロメートルにわたり有料
 貸付を受け、馬車道を私費で開通しました。そのとき無名の川に自分の名
 前から1字ずつとって「ニシシゲ（西・重）川」、「ニシタケ（西・武）川」
 等の川名をつけました。それがいつしか地名となり、1929（昭和4）年の
 字名改正から正式に「西竹」と決まりました。



にしただけかん い ゆうびんきょく
 ↑西竹簡易郵便局

なかしべつ かみしべつ
中標津・上標津

町の名前である中標津や上標津は、日本語とアイヌ語の「シ・ペツ」^{Shi - p e t}との
ごうせいご
合成語です。

「シ・ペツ」の「シ」^{しん}とは、『真の、本当の、大きな』^{ほんとう}の意味を持ち、「ペツ」^{い み も}
とは『川』^{ほんりゅう}のことです。つまり『大きな川』^{い み}=『本流』という意味になります。

中標津は「中」^{ちゅう}流域^{りゅういき}にあるシ・ペツ、上標津は「上」^{じょう}流域^{りゅういき}にあるシ・ペツ

※「シペ・オツ (Shipe-ot)」^{さけ}=『鮭の・群^{ぐんざい}在している』^{かいしゃく}という解釈もあります。

